



社会福祉領域で使用されているQOL測定尺度に関する批判的論評

著者	高橋 順一, 黒木 保博, 中嶋 和夫
雑誌名	評論・社会科学
号	111
ページ	113-124
発行年	2014-11-30
権利	同志社大学社会学会
URL	http://doi.org/10.14988/pa.2017.0000013858

論文

社会福祉領域で使用されている QOL 測定尺度に関する批判的論評

高橋順一¹⁾・黒木保博²⁾・中嶋和夫³⁾

要約：本研究は、社会福祉領域における QOL 測定尺度を用いた日本の研究業績について、特に統計学的な視座から批判的論評を行うことを目的とした。研究業績の収集には、「CiNii」を用いた。収集した 13 件の研究業績で使用されていた 5 種類の QOL 測定尺度を分析資料とした。分析においては、尺度開発における内容的妥当性及び構成概念妥当性に着目し、適切な統計学的手法がなされているかを評価した。その結果、ふたつの妥当性を十分備えているとみなせる尺度は、「人生満足度測定尺度 SWLS」と「ST 簡便 QOL 尺度」であった。しかし、社会福祉独自の事象に焦点を当てた一般成人に適用可能な QOL の測定尺度は皆無であり、今後は社会福祉独自の QOL 測定尺度を開発する必要が示唆された。

キーワード：社会福祉, QOL, 一般成人, 妥当性

目次

1. 序論
2. 本論
 - 2-1. 資料の概要
 - 2-2. 尺度の概要
 - 2-3. 内容的妥当性について
 - 2-4. 構成概念妥当性について
3. 結論

1. 序 論

1960 年代以降、国民の QOL (quality of life) の向上が政策に取り入れられるようになったことから明らかなように、先進諸国では QOL 評価が社会的な課題として重視されてきた。また、医学や老年学領域では、「生活・人生・生命の質」を意味する QOL の向上が継続して希求されている (Sirgy 2001; 前田 2009; Quality of Life 研究会

1) 同志社大学大学院社会学研究科博士後期課程

2) 同志社大学社会学部教授

3) 両備介護福祉研究所副所長

*2014 年 7 月 22 日受付, 2014 年 7 月 28 日掲載決定

2010)。わが国では、最近、雇用情勢の悪化、仕事上のストレスの増加、若年者の自殺率や生活保護受給率の上昇（内閣府 2013；厚生労働省 2012；2013）、さらには人口の高齢化や少子化などを背景に、一般の成人や高齢者、また要介護高齢者、障がい者、児童など、全国民の QOL の維持・改善が強く求められている（中央社会福祉審議会社会福祉構造改革分科会 1998；久保田ら 2006）。

従来の QOL 研究を概観すると、社会政策の領域では「国民生活指標」や「幸福度指標」を用いて、また保健医療の領域では疾病単位あるいは総合的な「健康関連 QOL 指標」を用いて、それぞれ異なる母集団の比較や介入効果に関する研究がなされている。また、老年学では、「主観的幸福感」や「生活・人生の満足度」を測定した研究が蓄積されている（Sirgy 2001；向井 2004；前田 2009；Quality of Life 研究会 2010）。ただし、社会福祉領域では 2000 年前後を境に QOL に関する議論が本格的にはじまったものの、その学術論文は必ずしも多くない（久保田ら 2006）。また測定尺度の開発に着目するならば、社会福祉領域では、主として老年学領域の成果を援用して高齢者の主観的幸福感や生活満足度、人生満足度（Neugarten et al. 1961；古谷野 1982；1983；石原ら 1992）などが検討されていることが特徴となっており、社会福祉領域で独自に開発された尺度はほとんど見あたらない。最近、大島らは精神障害者・高齢者・児童における福祉実践関連 QOL アウトカム指標を開発している（大島ら 2011）。しかし未だ社会福祉独自の QOL 尺度の開発やそれを用いた実証研究は皆無に等しいと言えよう。社会福祉領域においては、1998 年の中央社会福祉審議会社会福祉構造改革分科会による「社会福祉基礎構造改革について（中間まとめ）」の公表以降、全国民の QOL に関する研究を進める必要性が繰り返し指摘されている（中央社会福祉審議会社会福祉構造改革分科会 1998；久保田ら 2006）。通常、測定尺度の開発においては、「妥当性（内容的妥当性や構成概念妥当性など）」と「信頼性」の検討を前提とするが、従来の国民全体を視野に入れた QOL 測定尺度においては、「WHOQOL-100」（The WHOQOL Group 1998 a；1998 b）や、「健康関連 QOL 満足度尺度」（中嶋ら 2003）、「SF-36」（Ware et al. 1992）等を除いて、構成概念妥当性について因子構造の側面から構造方程式モデリングを用いて統計学的に吟味が加えられたものは見当たらない。社会福祉領域において科学的に有効な介入を検討するためには、特に妥当性が統計学的に検討された社会福祉独自の測定尺度を開発することが急務と言えよう。

そこで本研究では、一般成人を含む国民の社会福祉関連 QOL 測定尺度の開発に関する指針を得ることをねらいとして、社会福祉領域における QOL 測定尺度を用いた日本の研究業績について、統計学的な視座から批判的論評を行うことを目的とした。

研究業績の収集方法は、「CiNii」を用いて、日本の社会福祉領域における一般成人の QOL 測定尺度に関するものを検索することとした。検索におけるキーワードは、「コミ

ユニティワーク, コミュニティオーガニゼーション, ソーシャルワーク, ウェルビーイング, 福祉, social work, well-being, wellbeing, welfare, community work, community organization], 「生活の質, クオリティオブライフ, quality of life, QOL」, 「尺度, 調査, 指標, scale, questionnaire, measure, examination, investigation, research, survey, index」とした。

上記の検索結果の研究業績のうち, 以下のものを除外した。①社会福祉領域以外の医学や保健, 看護, 心理, 工学, 建築, 栄養などの領域に関する研究業績。②大学名や学部名などで検索されたが, 身体的・精神的健康に焦点が当てられている研究業績。③スピリチュアリティや痛みのみ焦点を当てている研究業績。④高齢者や障がい者, 患者, 未成年者, 家族介護者といった要支援者のみを対象とした研究業績。⑤QOL について議論・解説を行った研究業績。⑥社会福祉領域であっても, WHO の健康関連 QOL 測定尺度 (The WHOQOL Group 1998 a; 1998 b), 中嶋らの QOL 測定尺度 (中嶋ら 2003), SF-36 (Ware et al. 1992) に関連した研究業績。これらの研究業績を除外した理由は, ①本研究では主として一般成人に焦点を当てていること, ②身体的・精神的健康に焦点を当てているものは医学・保健等の領域に属すると推察されること, ③健康関連 QOL については保健医療領域において尺度開発や研究が進められていること, である。ただし, 保健や看護などの領域でも, 医療福祉など社会福祉に関わりのある研究業績は除外せずに資料として用いるものとした。社会福祉的な観点ということに関する判断基準は, 「社会福祉基礎構造改革について (中間まとめ)」 (中央社会福祉審議会社会福祉構造改革分科会 1998) や, 国際ソーシャルワーカー連盟 (IFSW) のソーシャルワークの定義 (IFSW 2000), 古川孝順による社会福祉の概念規定 (古川 2002; 2003; 2004; 2009) を参考に, 「生活の自立支援や個人の尊厳, 家庭・地域・社会生活の総合的支援に関するもの」と設定した。

以上のもとに収集した研究業績の分析では, 尺度開発における内容的妥当性及び構成概念妥当性に着目し, それぞれに適切な統計学的手法がなされているかを評価するものとした。内容的妥当性は, ①探索的因子分析が最尤法もしくは最小二乗法を用いてなされているか (豊田 2000), ②因子抽出における回転法は直交回転ではなく因子間に相関を認める斜交回転であるか (豊田 1998) の二側面を評価基準とした。構成概念妥当性では, ③構造方程式モデリング (Structural Equation Modeling) を用いて確認的因子分析がなされているか (豊田 1998) を評価基準とした。

2. 本 論

2-1. 資料の概要

社会福祉領域において、一般成人を対象に QOL 測定尺度を用いた研究業績は 19 件であった。しかし、社会福祉に関する QOL を測定するための、社会福祉関連 QOL と

表 1 社会福祉領域における QOL 測定尺度を用いた研究業績

	著者	年	タイトル	対象者	研究概要	使用 QOL 尺度	学会誌名
1	松田 隆治 福本 安甫 他	1999	青年期の QOL 特徴： QOL 調査票を用いた世 代別の比較	作業療法学科・社会福 祉学科の大学生、大学 教職員	大学生と教職員を対象に、WHO の QOL 26 と基本的 QOL 評価尺度を 用いて調査・分析を行い、青年期の QOL の特徴を検討した。	基本的 QOL 評価尺度 BAQL	作業療法
2	福本 安甫 江草 真 関谷 真	1999	Quality of Life の評価構 造に関する一考察	教職員、学生（18～73 歳、平均 27 歳）	健常成人を対象に、WHO の QOL 26 と基本的 QOL 評価尺度の因子構造 等を解析し、QOL の評価構造につ いて検討した。	基本的 QOL 評価尺度 BAQL	川崎医療 福祉学会 誌
3	福本 安甫 江草 真 関谷 真	2000	基本的 QOL 評価尺度の 開発－健常者を対象とし て－	大学生、大学職員、高 齢者	健常成人を対象に、基本的 QOL 評 価尺度の有効性を検討した。	基本的 QOL 評価尺度 BAQL	作業療法
4	福本 安甫	2000	QOL 評価における測度 設定の再検討	デイケア担当職員、作 業療法学科の大学生	成人と学生を対象に、基本的 QOL 評価尺度の有効性と QOL 評価にお ける恣意性との関連について検討し た。	基本的 QOL 評価尺度 BAQL	作業療法
5	池内 裕美 藤原 武弘	2000	物的所有物の喪失および ソーシャル・サポート・ ネットワークが生活の質 (QOL) に及ぼす影響： 阪神大震災の被災者を対 象として	20 代から 80 代の仮設 住宅居住者	物的所有物の喪失及びソーシャル・ サポート・ネットワークの大きさ と、QOL の関係を検討した。	日本語版 QLI (Quality of life index)	社会心理 学研究
6	神澤 創 西元 直美	2003	主観的幸福感に関する基 礎的研究：SWLS を用い て	大学生、短期大学生、 サークル活動に参加し た中年女性、老人大学 受講者、施設利用高齢 者	SWLS (satisfaction with life scale) の信頼性・妥当性、及び年齢・性別 による差を検討した。	SWLS (satisfaction with life scale)	関西福祉 科学大学 紀要
7	波多野義郎 松田智香子	2004	さまざまな成人・高齢者 グループにおけるライフ スタイル、危険因子、生 活の質の特性について	大学生、健康運動実践 指導士、市民、ウォー カー、デイサービス利 用者	成人・高齢者のライフスタイル特性、 生活習慣病危険因子該当状況、 QOL、ADL を測定し、それらの属性・ 年代による特徴について検討した。	波多野らの使 用した QOL 尺度	九州保健 福祉大学 研究紀要
8	下山 裕子 米谷真紀子 他	2005	木造町の養育期にある家 族の家族機能	木造町の 6 歳以下の子 どもをもつ養育期にあ る家族（父親・母親）	木造町の 6 歳以下の子どもをもつ家 族（父親・母親）の QOL、自己効 力感、家族機能を測定し、それら の特徴について検討した。	ST 簡便 QOL 尺度	青森県立 保健大学 雑誌
9	中村由美子 杉本 見子 他	2005	A 町の養育期にある家 族の家族機能の特徴	A 町の 6 歳以下の子 どもをもつ養育期にあ る家族（父親・母親）	養育期の家族（父親・母親）の QOL、 自己効力感、家族機能を測定し、そ れらの特徴について検討した。	ST 簡便 QOL 尺度	青森県立 保健大学 雑誌
10	中村由美子 杉本 見子 他	2006	A 町の中学生の子ども をもつ家族の家族機能の 特徴	A 町の中学生の子ど もをもつ家族（父親・ 母親）	A 町の中学生の子どもをもつ家族 （父親・母親）の QOL、自己効 力感、家族機能を測定し、それら の特徴について検討した。	ST 簡便 QOL 尺度	青森県立 保健大学 雑誌
11	中村由美子 赤羽衣里子 他	2006	A 町の養育期にある家 族と中学生の子どもをも つ家族の家族機能の比較	A 町の 6 歳以下の子 どもをもつ家族（父 親・母親）、中学生の 子どもをもつ家族（父 親・母親）	A 町の 6 歳以下の子どもをもつ家 族（父親・母親）と中学生の子ど もをもつ家族（父親・母親）の QOL、 自己効力感、家族機能を測定し、そ れらの特徴について検討した。	ST 簡便 QOL 尺度	青森県立 保健大学 雑誌
12	福本 安甫	2007	地方小都市住民の QOL に関する一考察：公開講 座等受講生を対象として	大学公開講座受講者、 学外講習会参加者、施 設職員研究会参加者 (平均年齢 51.9 歳)	市民の QOL の年代・性別等による 差を検討した。	基本的 QOL 評価尺度 BAQL	九州保健 福祉大学 研究紀要
13	福本 安甫 小川 敬之 他	2009	QOL の視点からみた新 入生の入学動機と意識変 化の検討	作業療法学科の大学生	大学生の意識と生活観としての QOL の変化の相互関係を検討した。	基本的 QOL 評価尺度 BAQL	九州保健 福祉大学 研究紀要

して定義され開発された測定尺度は皆無となっていた。上記 19 件の中では、健康関連 QOL である WHO の QOL 測定尺度を用いたものが 4 件（江頭ら 2000；岡本 2005；石井ら 2006；大塚ら 2011）、中嶋らの QOL 測定尺度を用いたものが 2 件（朴ら 2011；中嶋ら 2012）であった。これらを除外すると、最終的な分析資料としての研究業績は 13 件（松田ら 1999；福本ら 1999；2000；福本 2000；池内ら 2000；神澤ら 2003；波多野ら 2004；下山ら 2005；中村ら 2005；2006 a；2006 b；福本 2007；福本ら 2009）となった。

上記の 13 件は、1999 年から 2009 年と比較的最近なされた研究であった。13 件の研究業績の対象に関する内訳は、重複しているものもあるが、学生を対象としたものが 7 件、子育て世帯（親）を対象としたものが 4 件、大学の教職員等を対象としたものが 3 件、講演・講習受講者やサークル活動等の参加者といった市民を対象としたものが 3 件、看護師、介護福祉士等の通所施設職員や運動の指導士を対象としたものが 2 件、震災被災者を対象としたものが 1 件であった。13 件の研究業績において使用されていた QOL 測定尺度は、①福本（福本 1998 a；1998 b；福本ら 2000）の基本的 QOL 評価尺度 BAQL（basic quality of life scale）が 6 件、②澁谷（澁谷 2002）の ST 簡便 QOL 尺度が 4 件、③波多野ら（波多野ら 2002 a；2002 b）の使用した QOL 尺度が 1 件、④Diener ら（Diener et al. 1985）の SWLS（Satisfaction with Life Scale）が 1 件、⑤Ferrans ら（Ferrans et al. 1985）が開発し、松岡ら（松岡ら 1995）が改訂した日本語版 QLI（Quality of Life Index）が 1 件の、計 5 種類であった（表 1）。なお、使用尺度が明確に示されていないものもあったが、因子数及び因子名、項目数が同じであったため、その著者の尺度とみなした。

2-2. 測定尺度の概要

上記 5 種類の測定尺度の概要は以下の通りである。①福本の基本的 QOL 評価尺度 BAQL は、QOL に関する 14 項目と、生き方の反映度合いに関する 1 項目の計 15 項目で構成されており、14 基本項目または 15 項目の合計点の平均値を QOL 値とする尺度であった。またこの尺度は QOL の主観的評価を行うものであることが記されていた。因子に関しては健康度や心理的安定度、生活満足感、活動の自立度などが示されており、回答は線アナログスケールによる「0（全くない、非常に不満など）～100（非常に満足など）の無段階評価」のものとなっていた。なお 10 分割し、0～100 の値を記入し、それらの間に値のない線を加えた回答欄で調査を実施している研究業績もあった（福本 1998 a；1998 b；2007；福本ら 1999；2000）。

②日本語版 QLI は、そもそもは Ferrans らによって看護学領域における健常者及び透析患者を対象として開発された尺度である。これは、生活に関する 32 項目の重要度及

び満足度をライカート式に 6 段階で自己評価によって主観的 QOL を測定する計 64 項目の尺度となっている (Ferrans et al. 1985 ; 1992)。この測定尺度を松岡ら (松岡ら 1995) が、日本における健康な高齢者を対象とするため、健康に関する 7 項目を削除し、日本語版に改訂した 25 項目の重要度、満足度を問う計 50 項目としている。日本語版の因子は、生きがい、対人関係、社会環境、健康の 4 因子とされている。

③Diener らの開発した SWLS は、人生の満足度を測定する尺度である。これは、全 5 項目で、回答が 7 件法 (「1 強く反対する」から「7 強く同意する」) の主観的な満足度を測定する 1 因子の尺度である (Diener et al. 1985 ; Pavot et al. 1993)。人生への満足度や人生が理想的であるかなどを問う 5 項目で構成されている。日本においては、角野による日本語への翻訳、項目数の再検討も行われている (角野 1994 ; 1995)。

④波多野らの使用した QOL 尺度は、生き甲斐、人との会話、芸術的趣味、他人への奉仕、健康、ボランティア活動、旅行、異性との交流などの有無や楽しんだ経験について尋ねる 10 項目もしくは 12 項目、15 項目に、2 件法 (「はい」, 「いいえ」) で回答する尺度である (波多野ら 2002 a ; 2002 b ; 2004 ; 2005 ; 松田ら 2005 ; 九州保健福祉大学 QOL 研究機構 2005)。収集可能であった研究業績の中では、因子については記されていない。

⑤澁谷の ST 簡便 QOL 尺度は、Greenley らの精神病患者の QOL 測定尺度 (Greenley et al. 1997) を基礎に、日本の健常成人版として項目の再編・追加等が行われた尺度である。21 項目版、24 項目版、25 項目版、28 項目版がある。24 項目版に関しては、Greenley らの尺度に近いと、その改良版であると考えているということが記されている (澁谷 2002)。澁谷の 2008 年の研究業績に「QOL を我々の生活における物質的及び質的側面に関する主観的な満足度を推計する変数とした」 (澁谷 2008) と記されている。回答は、1~7 もしくは 1~6 までのライカートスケールである。6 因子もしくは 7 因子、8 因子、家族関係、居住環境、収入、仕事、自由時間・余暇、友人関係、健康、幸福感を基礎に QOL を測定する尺度となっている (澁谷 2002 ; 2008 ; 澁谷ら 2004 ; 2008 ; 2009 ; 渡部ら 2008 ; 2010)。

2-3. 内容的妥当性について

批判的論評に資する測定尺度は、①基本的 QOL 評価尺度 BAQL, ②日本語版 QLI, ③人生満足度測定尺度 SWLS, ④波多野らの使用した QOL 尺度, ⑤ST 簡便 QOL 尺度とした。

2-3-(a). 探索的因子分析が最尤法もしくは最小二乗法を用いてなされているか

前記 5 種類の測定尺度のうち、尺度開発等の研究業績において、探索的因子分析が行われていたものは、基本的 QOL 評価尺度 BAQL, 日本語版 QLI, 人生満足度測定尺度

SWLS, ST 簡便 QOL 尺度であった。これらのうちで、探索的因子分析の因子抽出法を最尤法もしくは最小二乗法を基礎に行っていた測定尺度は、人生満足度測定尺度 SWLS のみであった。人生満足度測定尺度 SWLS は、堀毛の研究業績において最尤法による探索的因子分析がなされていた（堀毛 2012）。基本的 QOL 評価尺度 BAQL は、探索的因子分析が主因子法で行われていた（福本ら 1999; 2000; 福本 2007）。日本語版 QLI と ST 簡便 QOL 尺度においては、因子抽出法が明確に記載されていなかったため不明であった（松岡ら 1995; 澁谷 2002; 2008; 渋谷ら 2004; 2008; 2009; 渡部ら 2008; 2010）。

2-3-(b). 直交回転か斜交回転か

探索的因子分析が行われていた上記 4 種類の尺度のうちで、尺度開発等の研究業績において、斜交回転で探索的因子分析が行われていたのは人生満足度測定尺度 SWLS と ST 簡便 QOL 尺度であった。人生満足度測定尺度 SWLS は、堀毛の研究業績において、斜交回転であるプロマックス回転により探索的因子分析がなされ⁽¹⁾、1 因子性が確認されたと示されていた（堀毛 2012）。ST 簡便 QOL 尺度は、探索的因子分析において斜交回転であるプロマックス回転やオブリンミン回転が採用されていた（渋谷 2002; 2008; 渋谷ら 2004; 渡部ら 2008; 2010）。基本的 QOL 評価尺度 BAQL は、探索的因子分析に直交回転であるバリマックス回転が採用されていた（福本 1998 b; 2007; 福本ら 1999; 2000）。また日本語版 QLI においてもバリマックス回転が採用されていた（松岡ら 1995）。

2-4. 構成概念妥当性について

5 種類の測定尺度のうち、確認的因子分析がなされていたのは、人生満足度測定尺度 SWLS と ST 簡便 QOL 尺度の 2 種類であった。人生満足度測定尺度 SWLS は、橋本らの研究業績において確認的因子分析がなされていた（橋本ら 2011）。ST 簡便 QOL 尺度は、尺度開発に関する研究業績の中で確認的因子分析がなされていた（澁谷 2002）。

以上、社会福祉領域における一般成人の QOL 測定尺度であった 5 種類の尺度について、内容的妥当性及び構成概念妥当性に着目し、それぞれに適切な統計学的手法がなされているかを評価した。その結果をまとめると（表 2）、内容的妥当性及び構成概念妥当性を十分備えているとみなされた尺度は、人生満足度測定尺度 SWLS であった。探索的因子分析における因子抽出法が不明であった点を除くと、ST 簡便 QOL 尺度も十分に妥当性を備えている尺度であった。

表 2 QOL 測定尺度の内容的妥当性及び構成概念妥当性

	QOL 測定尺度	探索的因子分析			確認的因子分析
		分析の実施	最尤法または 最小二乗法	斜交回転	分析の実施
1	基本的 QOL 評価尺度 BAQL	○			
2	日本語版 QLI	○	不明		
3	人生満足度測定尺度 SWLS	○	○	○	○
4	波多野らの使用した QOL 尺度				
5	ST 簡便 QOL 尺度	○	不明	○	○

※日本における分析に関してのみ記している

3. 結 論

本研究は、今後の一般成人の社会福祉関連 QOL 測定尺度の開発に関する指針を得ることをねらいとして、社会福祉領域における QOL 測定尺度を用いた日本の研究業績について、統計学的な視座から批判的論評を行うことを目的に行った。収集した日本の社会福祉領域における一般成人の QOL 測定尺度に関する研究業績において用いられていた QOL 測定尺度は、①福本の基本的 QOL 評価尺度 BAQL、②澁谷の ST 簡便 QOL 尺度、③波多野らの使用した QOL 尺度、④Diener らの人生満足度測定尺度 SWLS、⑤ Ferrans らが開発し、松岡らが改訂した日本語版 QLI の、計 5 種類であった。これら 5 種類の尺度の開発等に関する研究業績を収集し、内容的妥当性及び構成概念妥当性の検討が、適切な統計学的手法によってなされているかを評価した。その結果、内容的妥当性及び構成概念妥当性を十分備えているとみなされた尺度は、人生満足度測定尺度 SWLS であった。探索的因子分析における因子抽出法が不明であった点を除くと、ST 簡便 QOL 尺度も十分に妥当性を備えている尺度であった。本研究において用いた統計的評価基準が尺度の妥当性に関する全てではないが、日本の一般成人を対象とした内容的妥当性及び構成概念妥当性の確認された QOL 測定尺度があることが明らかとなった。特に人生満足度測定尺度 SWLS 及び ST 簡便 QOL 尺度を用いることで、科学的に有効な介入を検討することができると思われる。

しかし、「生活の自立支援や個人の尊厳、家庭・地域・社会生活の総合的支援」という社会福祉の観点における、社会福祉独自の事象に焦点を当てた一般成人の QOL 測定尺度は皆無であった。全国民の社会福祉関連 QOL の改善や低下予防に関する制度・政策・支援の有効性・効率性を、科学的根拠をもって測定・判定するためには、一般成人の社会福祉領域独自の QOL を測定する尺度を開発する必要があると考えられる。この社会福祉関連 QOL 測定尺度を開発することが、今後の課題である。社会政策や保健医

療の領域とは異なる社会福祉の専門職が目的としているエンドポイントを明確にし、科学的に評価を行い、個人・地域差をふまえた有効な実践を普遍化し、社会福祉専門職の知識・技術の質を高めていきたい。

注

- (1) プロマックス回転かどうかは明確には示されてはいなかったが、他の尺度が最尤法、プロマックス回転で探索的因子分析が行われており、当尺度「についても最尤法で因子分析をおこなった」(堀毛 2012) とあるため、プロマックス回転で分析がなされたものとみなした。

参考文献

- 石井八恵子・小幡セイ・野中和代・小林たつ子・江上京里・徳田和子 (2006) 「都市郊外在住の実年者の QOL に関する検討」日本健康医学会雑誌 14(4), 7-15.
- 池内裕美・藤原武弘 (2000) 「物的所有物の喪失およびソーシャル・サポート・ネットワークが生活の質 (QOL) に及ぼす影響：阪神大震災の被災者を対象として」社会心理学研究 16(2), 92-102.
- 石原治・内藤佳津雄・長島紀一 (1992) 「主観的尺度に基づく心理的な側面を中心とした QOL 評価表作成の試み」老年社会科学 14, 43-51.
- 江頭洋祐・久佐賀真理 (2000) 「看護・社会福祉系大学生の QOL 評価へのアプローチ：WHO/QOL-26 による調査結果と考察」九州看護福祉大学紀要 2(1), 133-139.
- 大島巖・宇野耕司・大島千帆・小佐々典靖・児玉桂子・志水田鶴子・瀬戸屋雄太郎・園環樹・高原優美子・道明章乃・費川信幸・平岡公一・廣瀬圭子・福井里江・藤岡孝志・吉田光爾 (2011) 『福祉実践プログラムのゴールを定めるアウトカム指標・尺度～共通ゴールとしての福祉関連 QOL 尺度作成をめざして～』平成 22 年度文部科学省・科学研究費補助金基盤研究 (A) 「プログラム評価理論・方法論を用いた効果的な福祉実践モデル構築へのアプローチ法開発」グループ分担研究報告書
- 大塚明子・秋山美栄子・森恭子・星野晴彦 (2011) 「価値観・労働観・ライフスタイル等に関する日本と北欧の比較調査研究 第 1 次報告」人間科学研究 33, 105-119.
- 岡本祐子 (2005) 「生活の質と精神的充足感から見た生涯学習ニーズ：成人期の『アイデンティティ探求』ニーズの分析」広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部, 教育人間科学関連領域 53, 175-183.
- 神澤創・西元直美 (2003) 「主観的幸福感に関する基礎的研究：SWLS を用いて」関西福祉科学大学紀要 6, 163-170.
- 九州保健福祉大学 QOL 研究機構 (2005) 『平成 16 年度研究報告書 1』九州保健福祉大学 QOL 研究機構
- Quality of Life 研究会編 (2010) 『QOL 学を志す人のために』丸善プラネット
- 久保田晃生・波多野義郎 (2006) 「社会福祉学における QOL 研究の意義」社会福祉学 47(3), 43-51.
- 厚生労働省 (2012) 「平成 24 年労働者健康状況調査」<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/h24-46-50.html>
- 厚生労働省 (2013) 「平成 25 年版厚生労働白書－若者の意識を探る－」日経印刷
- 国際ソーシャルワーカー連盟 (2000) 「国際ソーシャルワーカー連盟 (IFSW) のソーシャルワークの定義」 (=2001 IFSW 日本国調整団体による定訳 日本社会福祉士会ホームページ http://www.jacsw.or.jp/01_csw/08_shiryo/teigi.html)
- 古谷野亘 (1982) 「モラルスケール、生活満足度尺度および幸福度尺度の共通次元と尺度間の関連性」老年社会科学 4, 142-154.
- 古谷野亘 (1983) 「モラルスケール、生活満足度尺度および幸福度尺度の共通次元と尺度間の関連 (その 2)」老年社会科学 5, 129-142.
- 澁谷泰秀 (2002) 「第 2 章 (3) Quality of Life (生活の質)」三栖郁子編 『転換期の地方都市と福祉コミュニティの可能性：八戸市・むつ市の事例から』粹出版社, 99-112.
- 澁谷泰秀 (2008) 「項目反応理論を用いた ST 簡便 QOL 尺度の分析－実測データと 2-パラメタロジスティックモデルの比較－」地域社会研究 16, 11-29.

- 澁谷泰秀・渡部諭 (2004) 「高齢者の生活の質 (QOL) - 高齢者の意思決定と QOL に関する考察 -」 地域社会研究 12, 73-114.
- 澁谷泰秀・渡部諭 (2008) 「高齢者における右脳・左脳機能の志向性と幸福感との関連性」 青森大学・青森短期大学学術研究会研究紀要 31, 27-45.
- 澁谷泰秀・渡部諭 (2009) 「半球優位性とフレーミング効果および QOL との関連性 - 高齢者と若年者との比較 -」 地域社会研究 17, 41-68.
- 下山裕子・米谷真紀子・小山真貴子・工藤明美・中村由美子・澁谷泰秀 (2005) 「木造町の養育期にある家族の家族機能」 青森県立保健大学雑誌 6(1), 98-100.
- 角野善司 (1994) 「人生に対する満足尺度 (the Satisfaction With Life Scale [SWLS]) 日本版作成の試み」 日本教育心理学会総会発表論文集 36, 192.
- 角野善司 (1995) 「人生に対する肯定的評価尺度の作成 (1)」 日本教育心理学会総会発表論文集 37, 95.
- 中央社会福祉審議会社会福祉構造改革分科会 (1998) 「社会福祉基礎構造改革について (中間まとめ)」 <http://www1.mhlw.go.jp/houdou/1006/h0617-1.html>
- 豊田秀樹 (2000) 「共分散構造分析 [応用編] - 構造方程式モデリング -」 朝倉書店
- 豊田秀樹 (1998) 「共分散構造分析 [入門編] - 構造方程式モデリング -」 朝倉書店
- 内閣府 (2013) 「平成 25 年版自殺対策白書」 勝美印刷
- 中嶋和夫・香川幸次郎・朴千萬 (2003) 「地域住民の健康関連 QOL に関する満足度の測定」 厚生学の指標 50(8), 8-15.
- 中嶋和夫・朴志先・小山嘉紀・尹靖水 (2012) 「父親の家事参加が自身の心理的 Well-being に与える影響」 評論・社会科学 99, 15-25.
- 中村由美子・杉本晃子・澁谷泰秀・下山裕子・米谷真紀子・小山真貴子・工藤明美 (2005) 「A 町の養育期にある家族の家族機能の特徴」 青森県立保健大学雑誌 6(3), 379-389.
- 中村由美子・杉本晃子・赤羽衣里子・澁谷泰秀・下山裕子・米谷真紀子・小山真貴子・工藤明美 (2006 a) 「A 町の中学生の子どもをもつ家族の家族機能の特徴」 青森県立保健大学雑誌 7(1), 45-52.
- 中村由美子・赤羽衣里子・杉本晃子・澁谷泰秀・下山裕子・米谷真紀子・小山真貴子・工藤明美 (2006 b) 「A 町の養育期にある家族と中学生の子どもをもつ家族の家族機能の比較」 青森県立保健大学雑誌 7(2), 203-212.
- 朴志先・金潔・近藤理恵・桐野匡史・尹靖水・中嶋和夫 (2011) 「未就学児の父親における育児参加と心理的ウェルビーイングの関係」 日本保健科学学会誌 13(4), 160-169.
- 橋本京子・子安増生 (2011) 「楽観性とポジティブ志向および主観的幸福感の関連について」 パーソナリティ研究 19(3), 233-244.
- 波多野義郎・松田智香子 (2002 a) 「高齢ウォーカーおよび健常高齢者のライフスタイル・ADL の比較結果について」 ウォーキング研究 6, 115-120.
- 波多野義郎・松田智香子 (2002 b) 「福祉系大学学生におけるレクリエーション活動と QOL, 体力自己評価の現状」 九州保健福祉大学研究紀要 3, 101-106.
- 波多野義郎・松田智香子 (2004) 「さまざまな成人・高齢者グループにおけるライフスタイル, 危険因子, 生活の質の特性について」 九州保健福祉大学研究紀要 5, 63-69.
- 波多野義郎・佐藤広徳・久下浩史・松田智香子・柿山鉄二・上田留理・藤川秋子・佐藤信博・福田修・眞竹昭宏・福元清剛 (2005) 「延岡在住中高齢者グループにおける身体機能測定成績と日常生活活動能力 (ADL), 生活の質 (QOL) について」 九州保健福祉大学研究紀要 6, 11-18.
- 福本安甫 (1998 a) 「QOL 定量評価法の開発: BAQL 試表 II の妥当性と信頼性」 作業療法 17, 221.
- 福本安甫 (1998 b) 「QOL 評価尺度の試作と検証 (II) - 基本指標評価 (BAQL) の開発 -」 吉備国際大学保健科学部紀要 3, 49-55.
- 福本安甫 (2000) 「QOL 評価における測度設定の再検討」 作業療法 19(5), 473-476.
- 福本安甫 (2007) 「地方小都市住民の QOL に関する一考察: 公開講座等受講生を対象として」 九州保健福祉大学研究紀要 8, 153-157.
- 福本安甫・江草安彦・関谷真 (1999) 「Quality of Life の評価構造に関する一考察」 川崎医療福祉学会誌 9

- (2), 183-190.
- 福本安甫・江草安彦・関谷真 (2000) 「基本的 QOL 評価尺度の開発 - 健常者を対象として -」 作業療法 19(1), 24-31.
- 福本安甫・小川敬之・田中睦英・押川武志 (2009) 「QOL の視点からみた新入生の入学動機と意識変化の検討」九州保健福祉大学研究紀要 10, 145-151.
- 古川孝順 (2002) 『社会福祉学』誠信書房
- 古川孝順 (2003) 『社会福祉原論』誠信書房
- 古川孝順 (2004) 『社会福祉学の方法』有斐閣
- 古川孝順 (2009) 『社会福祉の拡大と限定 - 社会福祉学は双頭の要請にどう応えるか -』中央法規出版
- 堀毛一也 (2012) 「サステイナブルな心性と行動の関連に関する予備的検討: sustainable well-being への心理学的アプローチ」『エコ・フィロソフィ』研究 6, 61-76.
- 前田展弘 (2009) 「QOL (Quality of Life) 研究の潮流と展望」ニッセイ基礎研 REPORT 2009 年 12 月号 32-37.
- 松岡克尚・山本誠・孫良・浅野仁 (1995) 「QOL 測定スケール (日本語版 QLI) の開発: 高齢者を対象として」関西学院大学社会学部紀要 72, 113-133.
- 松田智香子・波多野義郎・上田留理・久下浩史 (2005) 「中・高年者の身体組成と健康体力評価」九州保健福祉大学研究紀要 6, 173-177.
- 松田隆治・福本安甫・難波悦子・江草安彦・関谷真 (1999) 「青年期の QOL 特徴: QOL 調査票を用いた世代別の比較」作業療法 18, 77.
- 向井信一 (2004) 「『生活の質』評価に関する一考察」同志社政策科学研究 6(1), 203-222.
- 渡部諭・澁谷泰秀 (2008) 「高齢者と非高齢者の意思決定方略と生活の質 (QOL) との関係」地域社会研究 16, 67-84.
- 渡部諭・澁谷泰秀 (2010) 「高齢者の意思決定方略と生活の質 (QOL)」日本認知科学会大会発表論文集 27, O 6-5. <http://www.jcss.gr.jp/meetings/JCSS2010/proceedings.html>
- Diener, E・Emmons, R. A・Larsen, R. J・Griffin, S (1985) The Satisfaction with Life Scale. Journal of Personality Assessment, 49, 71-75.
- Ferrans, C. E・Powers, M. J (1985) Quality of life index: development and psychometric properties. Advances in Nursing Science, 8(1), 15-24.
- Ferrans, C. E・Powers, M. J (1992) Psychometric assessment of the Quality of Life Index. Research in Nursing & Health, 15(1), 29-38.
- Greenley, J. R・Greenberg, J. S・Brown, R (1997) Measuring quality of life: a new and practical survey instrument. Social Work, 42(3), 244-254.
- Neugarten, B. L・Havighutst, R. J・Tobin, S. S (1961) The measurement of life satisfaction. Journal of Gerontology, 16, 134-143.
- Pavot, W・Diener, E (1993) Review of the Satisfaction with Life Scale. Psychological Assessment, 5, 164-172.
- Sirgy, M. J (2001) Handbook of Quality-of-Life Research: An Ethical Marketing Perspective. Kluwer Academic Publishers (=2005, 高橋昭夫, 藤井秀登, 福田康典訳『QOL リサーチ・ハンドブック: マーケティングとクオリティ・オブ・ライフ』同友館)
- The WHOQOL Group (1998 a) The World Health Organization quality of life assessment (WHOQOL): Development and general psychometric properties. Social Science & Medicine, 46(12), 1569-1585.
- The WHOQOL Group (1998 b) Development of the World Health Organization WHOQOL-BREF quality of life assessment. Psychological Medicine, 28(3), 551-558.
- Ware, J. E・Sherbourne, C. D (1992) The MOS 36-item short-form health survey (SF-36). I. Conceptual framework and item selection. Medical Care 30(6), 473-483.

A Critical Review of the QOL Scale in the Field of Social Welfare

Junichi Takahashi, Yasuhiro Kuroki and Kazuo Nakajima

The purpose of this critical review is to review the studies used the QOL scale in the field of social welfare in Japan from the standpoint of statistics. We retrieved and gathered the studies from data base of “CiNii”. Eventually, we reviewed the five QOL scales used in the thirteen studies we gathered. We checked content validity and construct validity of the five QOL scales for evaluating them from the standpoint of the correct statistical procedure. In the result, the scales had sufficient validities were “SWLS” and “ST-QOL”. But there was not a QOL scale had applicability to the general adults focusing on the events of social welfare. Therefore, it is necessary to be developed social welfare related QOL scale for the general adults.

Key words : Social welfare, QOL, General adult, Validity